

朝鮮王陵における玄宮の造成方法

キム・サンヒョプ

(翻訳：松永悦枝)

Construction Methods for Burial Chambers in the Joseon Royal Tombs

KIM Sang-Hyeop

朝鮮王陵の石室玄宮は、初期から造成が行われた。またそれまでの古制が研究・整理され、世宗代には『五礼儀』が編纂された。その後、世祖の遺命により、玄宮は石室でなく灰隔で造成されるようになった。

石室玄宮には単陵と双陵、合葬陵があるが、築造に使用される石材には違いがある。単陵と双陵は、壙中に旁（傍）石と北隅石、蓋石、加置蓋石、門立石、門闕石、門扉石、門倚石などが置かれる。石室の上部には蓋石が置かれ、蓋石の下面は、北隅石と両旁石、門立石などと組み合うよう、加工されている。

合葬陵では単陵の部材に加え、仕切として隔石が設けられる。隔石は中央に窓穴が両側に空けられ、石室中央に南北方向に置かれる。隔石と北隅石や、北隅石と両旁石は、抜けたり倒れたりしないよう、接合部が加工されている。このように、単陵と双陵は蓋石を中心に玄宮が造成され、『五礼儀』編纂時の合葬陵は、隔石を中心に東・西室を分ける玄宮が造成された。

玄宮の下部には床面が設けられるが、この床面は、単陵と双陵の場合は雑石と土で突き固められ、合葬陵では炭粉と三物（漆喰、細砂、黄土を混ぜたもの）、銅網などを用いて堅固に造成された。こうした方法は『世宗実録五礼儀』や『国朝統五礼儀』に記載されており、古制の研究により生み出された石室玄宮の発展型と言えよう。

いっぽう世祖の光陵以降、王陵には石室が用いられなくなり、「灰隔」の玄宮が登場する。灰隔とは朱子が著した『家礼』に登場し、朝鮮時代初期における儒教理念の浸透とあいまって広く普及していった。

灰隔の玄宮は、まず壙を掘り、壙の下で炭末に火をつけて焼き、三物で床面を突き固める。次に傍灰を設けるが、その方法は二つに大別される。こうした工法は石室玄宮とは異なるが、概念は同じものと考えられ、旧禧陵の発掘調査によっても確認されている。

キーワード：朝鮮時代 (Chosŏn Dynasty), 灰隔陵 (Lime tomb), 王陵 (Royal Tomb), 旧禧陵 (Guhui Tomb), 築造方法 (Construction method)

序論

1 研究目的

本稿は、朝鮮王陵の玄宮¹⁾ 造成方法について、『朝鮮王朝実録』や『世宗実録五礼儀』、『国朝五礼儀』、『国朝統五礼儀』、『国朝喪礼補編』にみられる山陵制度の記事を通じて考察したものである²⁾。

朝鮮王朝は建国直後、高麗末の混乱を払拭し、あらたな集権体制を構築するための統治手段として、朱子の『朱子家礼』をはじめとする儒教倫理の実行と普及などの儀礼整備を行なった。このような整備は朝鮮初期の太祖4年、宗廟と社稷を漢陽（ソウル）に建設し、祭祀を行うことにより開始された。これにより、祭礼は礼治主義を掲げた国家統治の重要な理念として認識・重視されるようになり、建国から世宗代までの礼制研究が『世宗実録五礼儀』として一次的に整理された。その後、成宗代までの歴史的経験をへて『国朝五礼儀』が完成し、朝鮮中期以降、『国朝統五礼儀』が補完・編纂された。その後も『国朝喪礼補編』などが編纂され、儒教的理念のもと、宮殿をはじめとした宗廟、墳墓、各地方の郷校、書院などが建設された。これらの儒教建築については、これまでも多くの建築的研究成果が出されている。いっぽう、朝鮮王陵の建築については多くの遺構が現存しており、その変化が保守的かつ伝統性が強く、時間的・空間的な特性が強く反映される遺構であるにもかかわらず、いまだ整理されていない。

本稿では、朝鮮王陵の玄宮構造の考察を通じ、古代の古墳、三国・高麗時代の王陵をへて発達してきた朝鮮初期王陵の石室玄宮と、灰隔玄宮の墓制について検討する。とくに発掘や調査、および精密な実測が行われていない朝鮮王陵について、文献資料からの考察と、2008年に発掘調査された中宗の章敬王後の初葬地である旧禧陵を中心に、玄宮の構造と形態などの造成方法を検討することで、以後、王陵の復元と発掘において重要な資料となるであろう。

2 研究方法

朝鮮時代における王陵は全部で44基あり、遺構の残存状態は比較的良好であるが、その研究は皆無といってもよい。だが、朝鮮五百年の歴史を羅列することでこれを解明するのは困難であり、また現在、玄宮の発掘調査と精密な実測調査が行なわれておらず、資料面においても限界がある。

朝鮮においては、王と王妃が薨去すると臨時機構である三都監が設置され、国葬のすべての儀礼を主管した。その際、在位の王と臣下は、風水と択地（よい土地を選ぶこと）、吉日の選択、日時などを議論して決定し、これらを『朝鮮王朝実録』に記録した。これらに関する儀礼が終わると、その顛末は『国葬都監儀軌』、『殯殿都監儀軌』、『山陵都監儀軌』といった文献（報告書）にまとめられた。これらは朝鮮王陵の玄宮に関する一次資料であり、高麗末から朝鮮初期にかけての石室玄宮と、世祖以降に登場した灰隔玄宮の構造や形態、造成方法を明らかにする上で、きわめて高い資料的価値を有している。

1) 玄宮とは、王の棺を埋葬した壙中を指す。朝鮮時代の初期には石室で、世祖以降は灰隔で造成された。灰隔玄宮とは、三物（石灰、本土、細砂を配合したもの）によって造成されたものである。本稿では、石材を使用した玄宮を石室玄宮、三物を用いた玄宮を灰隔玄宮とそれぞれ表記する。

2) 山陵制度に関する記事は、『世宗実録』2年（1420）1月3日、9月16日、4年（1422）9月6日、27年（1445）4月4日、28年（1446）7月19日、『世宗実録』五礼儀（治葬）、国朝統五礼儀（巻7、凶礼）などにみられる。

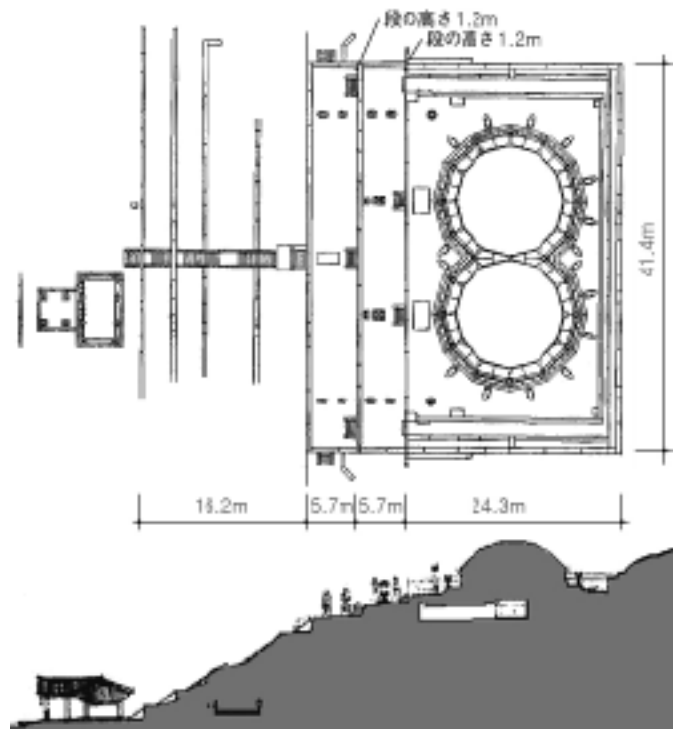
朝鮮初期王陵における石室玄宮の構造

1 高麗末の石室制度運用

朝鮮初期王陵を考える上で重要なのは、高麗王陵に対する理解である。朝鮮初期における王陵制度は、高麗最後の王陵である恭愍王（1330～1374年）の玄陵が踏襲、施行されたものである（図面1）。

高麗王陵の墓域構造について、植民地期に調査を担当した今西龍は、次のように記している。

陵域ハ幅十間³⁾ 内外長二十間内外ノ長方形ノ地ヲ劃シテ左右後ノ三方ニ石牆ヲ繞ラシ、其区域内ヲ四壇面トシ各壇面ノ前方ハ石壁ヲ築キテ土留メトナシ石階段ニテ連絡シ最上既最奥ノ壇ニハ陵アリ、陵ハ高サ十尺乃至十五尺径二十尺乃至三十尺封土ノ形半球形ヲナシ、陵ハ石屏ヲ以テ其裾ヲ擁シ、其周囲ニ石欄干ヲ繞圍シ石獸ヲ排置シ、正面ニ長方形ノ石床ヲ置キ、左右ニ望柱石ヲ建ツ、其第二壇ノ正面ニハ長明燈ヲ置キ、左右ニ文石人ヲ対立セシメ、第三壇面ニハ左右ニ武石人ヲ対立セシメ、第四段ハ縦ヤ、広クシテコ、ニ丁字閣アリ、…丁字閣下ノ左方右向テニ陵碑アリカ如シ⁴⁾



図面1. 高麗恭愍王玄陵の層階（推定図）

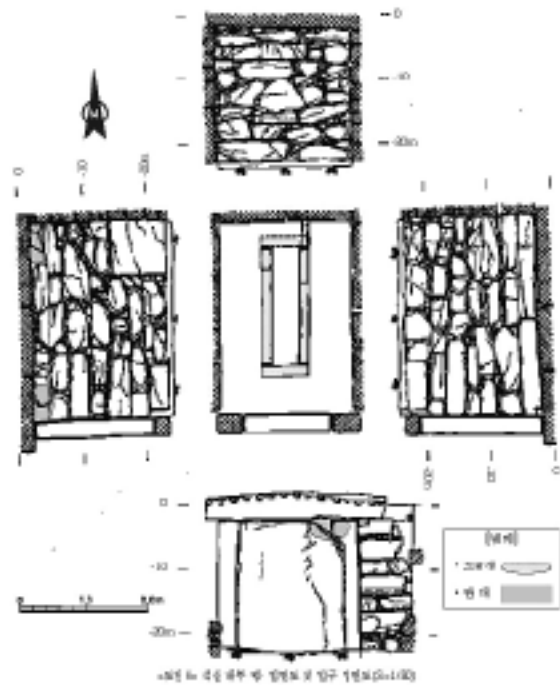
封墳は護石をめぐらせた円形を基本とするが、恭愍王の玄陵のように、王妃（魯国大長公主）の靖陵と連結した双陵型式もある。石室玄宮は半地下、もしくは地下に設けられ、整形した石材を用い、方形になるように2～3段積み上げられる。天井は平天井構造で、石室玄宮全体が四角形を呈する。石室玄宮は方形を呈し、規模は通常一辺3m、高さ2.5m前後を測り、石の表面には灰漆喰が塗られ、天井には星辰図、四壁には四神図と十二支像、花、竹、松、人物などの壁画が描かれている。また、玄室床面には磚が敷かれ、中央に棺台が設けられる。石室は南側に開口する板石閉塞の無羨道式である⁵⁾。高麗王陵の構造は、おおよそ統一新羅の石室墳を継承したものであるが、具体的な個々の構造という面では、新羅の様式は消滅したといえよう。いっぽう王陵以外で調査された高麗壁画墓は、立地においては王陵

3) 陵域の規模はおよそ東西18m、南北36m。計算によると1間は約1.8mである。

4) 今西龍、「高麗諸陵墓調査報告」『朝鮮古蹟調査報告大正五年度』、朝鮮総督府、p279（再引用）

5) 金元龍・安輝濬『韓国美術史』（ソウル大学校出版部、1993）、p257～260

クラスの墓に類似しているが、墓域の規模・装飾はかなり簡素化されている。玄陵の石室構造は高麗末のものであり、それ以前に造成された第21代熙宗（1181～1237年）の碩陵⁶⁾とは大きく異なっている。碩陵の石室は、墓壙を穿って地下に設けられ、方形を呈し、内部四壁面に割石を積み上げたものである（図面2）。石室南の両側には門立石が置かれ、1枚の板石で入口を塞いでいる。石室中央には棺台が設置されるが壁画はみられず、大形の板石を用いて平天井構造とし、封土によって墳丘を造成している（写真1・2）。また居昌屯馬里壁画古墳の石室は、墓壙を穿ち、数枚の板石で三面の壁をなし、壁面には漆喰の上に黒・緑・褐色を用いて人物が描かれている（写真3・4）。



図面2. 碩陵石室内部の平・立断面図

〈参照：国立文化財研究所、「江華碩陵」、仁川広域市江華島、2003〉

この壁画古墳は合葬陵であり、東室東壁には6人の仙女が描かれ、北壁にはかすかに文字の痕跡が観察される。石室西壁には女性2人、男性1人の壁画が確認され、その形状から楽器を演奏する姿と思われる。人物の動きは伸びやかで生き生きとしている。また、石室は南北に長い方形を呈し、東室と西室の中間に板石を立てて空間を分けている（図面3）。この板石の中央部には四角い穴が穿たれており、そのなかに副葬品を入れて保管したと思われる。石室は南側に開口し、入口を1枚の板石によって閉塞している。墓壙と石室壁体の間は、割石が積み上げられている。平天井構造をなし、数枚の板石を架構したその上部には封土によって被覆する。



写真1. 碩陵の石室入口の板石除去後全景



写真2. 碩陵の石室入口からの内部全景

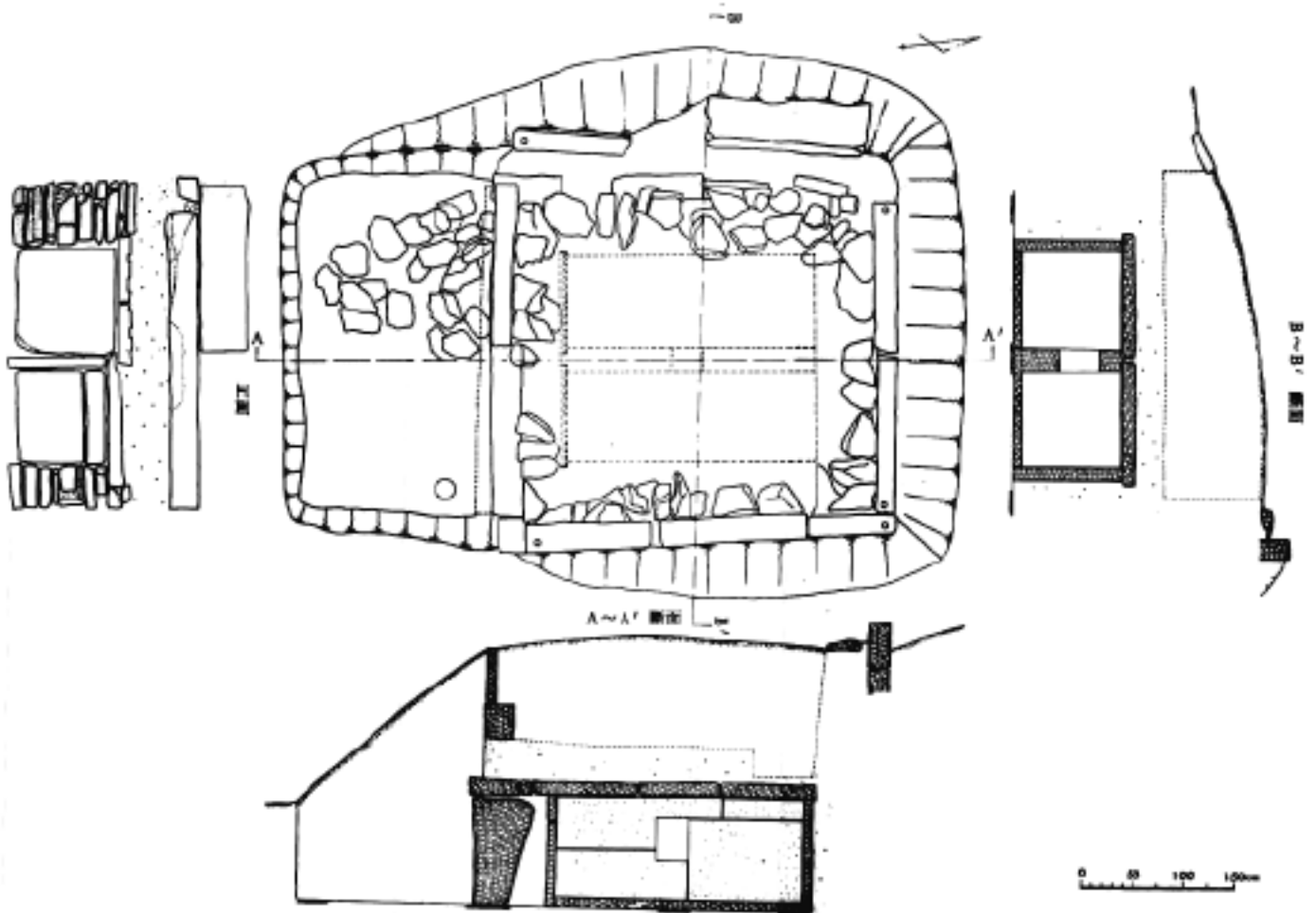
6) 碩陵は仁川広域市江華郡良道面吉亭里にある高麗第21代熙宗の陵。史跡第369号である。



写真3. 居昌屯馬里古墳の石室入口全景



写真4. 居昌屯馬里古墳東石室の内部全景



図面3. 同封二石室内部の平面図・立断面図

〈参照：文化財管理局，「居昌 屯馬里壁画古墳および灰槨墓発掘調査」，1974〉

朝鮮王陵の玄宮は、①単陵と双陵、②合葬陵のふたつに大別される。単陵はひとつの封墳に玄宮が1基設けられる。双陵はふたつの封墳にそれぞれ玄宮が1基設けられるが、基本構造は単陵と同様である。合葬陵はひとつの封墳に2基の石室が設けられ、内部で東室と西室に分けられる。

2.2 朝鮮初期の石室玄宮制度

(1) 単陵と双陵

朝鮮は建国直後から高麗末の政治的・文化的混乱を收拾し、あらたな集権体制の構築に努めた。その体制において、国家儀礼の確立はたいへん重要な事項であった。朝鮮建国以前に造成された神懿王后（太祖李成桂の夫人）の齊陵（北朝鮮所在）は、高麗から朝鮮への転換点となる王陵である。いっぽう朝鮮初期の王陵である定安王后（第二代王、定宗の夫人）の厚陵については、『世宗実録』に石室の幅と長さ、高さなど、石室構造の大部分が詳しく列記されている。石室の規模は、長さ11尺、高さ7尺、幅8尺である。傍石は石室両壁面に位置する部材として、北隅石と門立石を支えて設置された。

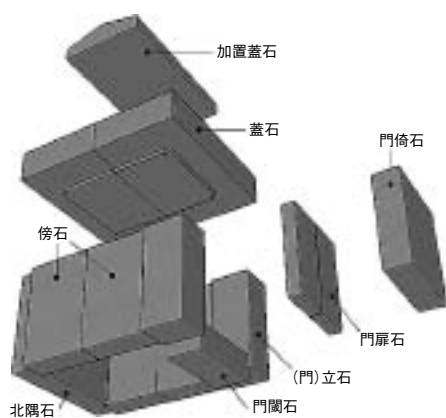
厚陵と献陵は単陵と双陵という差はあるが、おおよそ同じ部材が用いられている（表1・2および挿

表1. 厚陵の石室部材（世宗実録（2年，1420年1月3日））

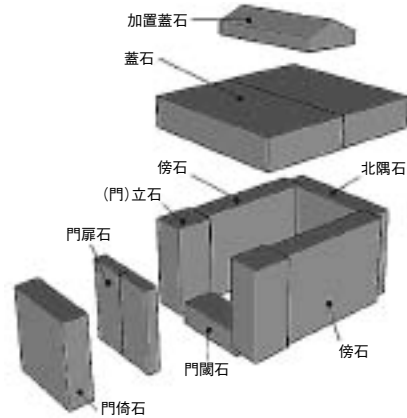
石室部材 (単陵)	厚陵（定宗の定安王后）				
	個数	幅	長さ	厚さ	高さ
石室	1	8尺	11尺		7尺
傍石	4		5尺7寸	2尺5寸	8尺
蓋石	2	8尺	14尺	3尺	
加置蓋石	1	5尺	10尺5寸	中厚2尺 四辺厚1尺	
北隅石	1		11尺	2尺5寸	8尺
立石	2	3尺5寸		3尺	8尺
門闕石	1	3尺	7尺	2尺	
門扉石	2	3尺5寸		1尺	7尺
門倚石	1	7尺		2尺	7尺

表2. 献陵の石室部材（世宗実録（2年，1420年9月16日））

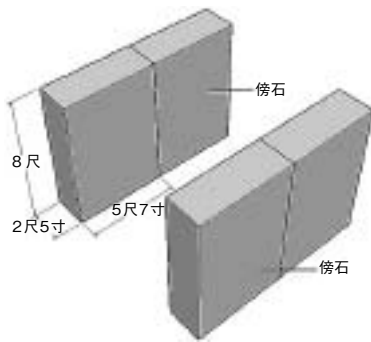
石室部材 (双陵)	献陵（太宗の元敬王后）				
	個数	幅	長さ	厚さ	高さ
石室	1	8尺	11尺		7尺
傍石	2		11尺5寸	2尺5寸	8尺
蓋石	2	8尺	14尺	3尺	
加置蓋石	1	5尺	10尺5寸	中厚2尺 四辺厚1尺	
北隅石	1		11尺	2尺5寸	8尺
立石	2	3尺5寸		3尺	8尺
門闕石	1	3尺	7尺	2尺	
門扉石	2	3尺5寸		1尺	7尺
門倚石	1	7尺		2尺	7尺



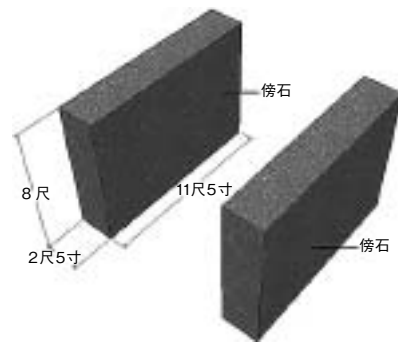
挿図1. 厚陵（単陵の石室玄宮）



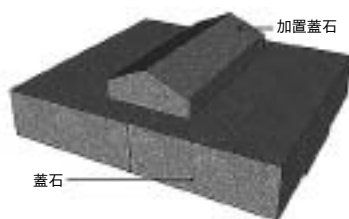
挿図2. 献陵（双陵の石室玄宮）



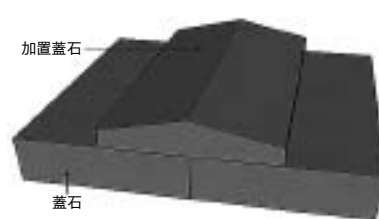
挿図3. 厚陵の傍石



挿図4. 献陵の傍石



挿図5. 厚陵の蓋石と加置蓋石



挿図6. 献陵の蓋石と加置蓋石

図1・2)。ただ両傍石は、厚さと高さは同じだが、厚陵が4枚、献陵が2枚で、長さも異なっている。厚陵は4枚の石をそれぞれ2枚一組にして傍石としたとあるのに対し、献陵は傍石の部材が塼石であり、両側に1枚ずつと記されている（挿図3・4）。また、石室天井に置かれる蓋石は石室部材のなかで最も大きく、前後ふたつの部材からなる（挿図5・6）。まず石室後部の蓋石は、下面にほぞ穴が穿たれ、北隅石と両傍石の上に置かれる。これにより、石室前部の蓋石と合わせ、北隅石が外からの圧力によって石室内に押し出されるのを防ぐのである。蓋石は、石室玄宮の構造的安定性を維持する上で最も重要な役割を果たす部材である。石室の梓宮が安置されると、石室入口は門扉石によって閉塞されるが、前部の蓋石は、門扉石が石室内へ押し出されるのを防ぐことになる⁷⁾。こうした石室玄宮の構造は、国家儀礼が成立し、『五礼儀』が編纂された世宗代まで維持、補完されつつ、さらに堅固で安定した構造へと変化した。

(2) 合葬陵

朝鮮前期における国家儀礼の成立は、世宗代において、学術機関を中心に古制研究が進んだことによる。『世宗実録五礼儀』や、成宗代における『国朝五礼儀』などによって、王陵墓制と制度はより強固なものになった。『五礼儀』にみられる石室玄宮は合葬陵として東・西室に区分される。使用される石材は蓋石、北隅石、両傍石などがあり、単陵と類似するが、ふたつの石室を築くために間仕切り壁である隅石が設けられる（表3および挿図7）。

隅石の中央には隅石を貫通した窓穴が設けられ、そこに明器と副葬品が納められた。窓穴は横長板に

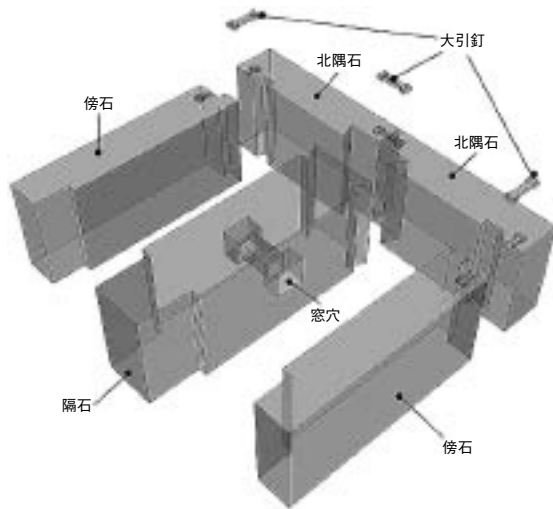
7) 金相浹「朝鮮前期王陵における石室築造の研究」(『大韓建築学会論文集』v.25 n.7, 2009), p179

表3. 世宗実録五礼儀の石室部材

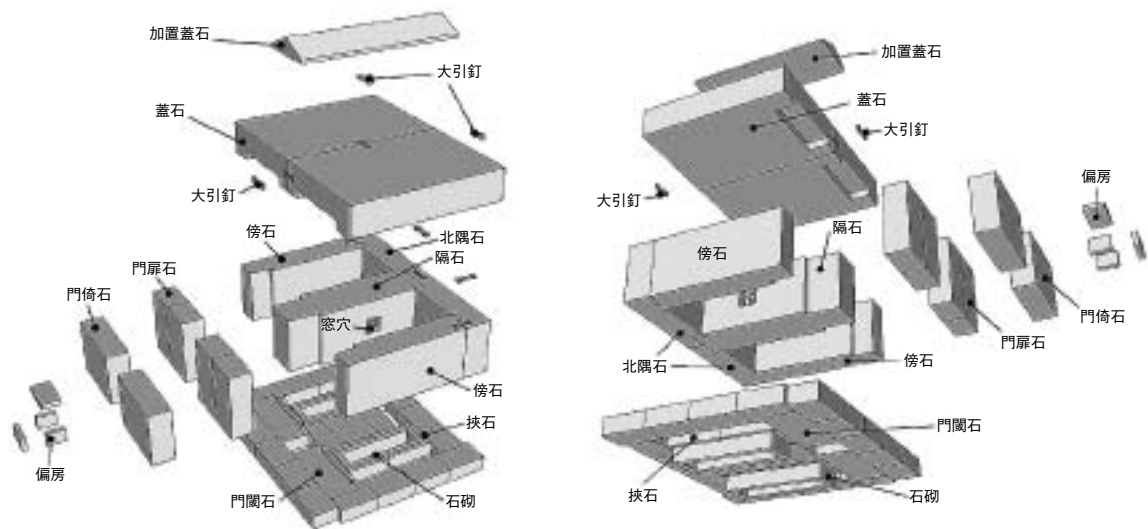
石室部材 (合葬陵)	世宗実録五礼儀				
	個数	幅	長さ	厚さ	高さ
銅網		5尺7寸	10尺2寸		
薄石		適当に	3尺9寸		1尺5寸
隔石下の薄石		適当に	4尺4寸		1尺5寸
傍石	2		12尺5寸	2尺5寸	5尺5寸
蓋石	2	10尺	14尺5寸	3尺	
加置蓋石	1	5尺	14尺5寸	中厚1尺5寸 両辺厚3寸	
北隅石	2		10尺	2尺5寸	5尺5寸
門闕石	2	3尺	7尺5寸	2尺	
門扉石	4	3尺2寸5分		2尺	6尺3寸
門倚石	2	6尺5寸		2尺	5尺
隔石	1		14尺	4尺	5尺5寸
大引釘	24	広2寸7分 広4寸9分	腰長1尺2寸1分 頭長3寸	厚2寸2分	
中引釘	12	広2寸1分 広4寸8分	腰長1尺4寸 頭長2寸2分	厚2寸	
石砌	2	3尺9寸	8尺7寸		1尺8寸
挾石		5寸	適当に		1尺5寸
横帯板	2	3尺9寸	8尺7寸	4寸	
偏房-面石	1		2尺2寸	4寸	1尺2寸
偏房-隅石	2		1尺6寸	4寸	1尺2寸
偏房-蓋石	1	1尺6寸	3尺	4寸	

よって閉塞，裝飾された。窓穴に納まりきらない副葬品は，偏房に納められた。また，北隅石や隔石，傍石，蓋石など，部材と部材の接合部には大引釘と中引釘が用いられた。ふたつの石室を覆う蓋石は，東・西室にそれぞれ1枚ずつ架構され，南の下面には門扉石が入るように蓋石表面が整えられている。北隅石は二枚からなり，それぞれ東室と西室の北に配されるが，西室の北隅石と西側の傍石が直交する部分には，深さ5寸，幅1尺のほぞ穴を設けて傍石の北端を北隅石にかませるカマ継ぎ (halved joint) が用いられている。同じく東室も北隅石の東端をカマ継ぎ (halved joint) によって傍石とかませ，二枚の北隅石の接合部はアリ継ぎ (dovetail joint) のように，左右を斜めに掘って隔石の北端部をはめ込み，外れないようにしている⁸⁾。北隅石と両傍石の組合せのみならず，隔石は，側面の圧力によって北隅石との間に隙間が生じるのを防ぐとともに，各石材が石室内へ傾くのを防ぐというふたつの利点を有する最も重要な部材である。

8) 金相浹『朝鮮王陵石室および陵上構造の変遷に関する研究』(明知大学校博士論文, 2007), p112~114



挿図7. 合葬陵の石室玄宮〈世宗実録五礼儀〉
 〈参照：金相浹（2007），『朝鮮王陵石室および陵上構造の変遷に関する研究』明知大学校博士論文〉

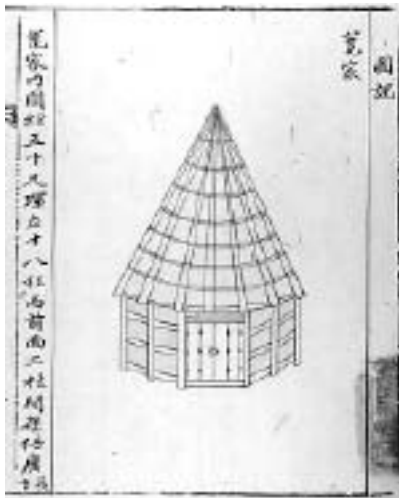


2.3 朝鮮初期石室玄宮の造成方法

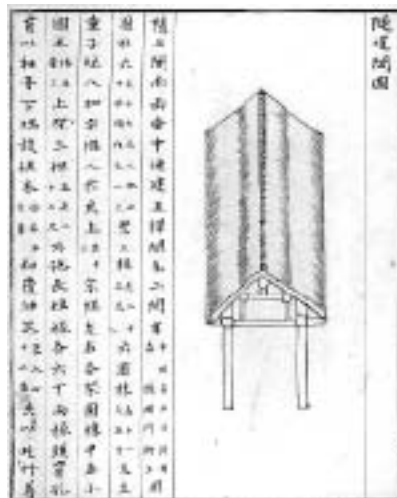
王陵を造成する地が選ばれると、壙中（墓壙）を掘り始める。壙中を掘る際は、わらを編んでつくった仮設物が建てられるが、これを陵上閣あるいは園上閣、もしくは瓮家という（挿図8）。陵上閣とは、壙中を外部から見えなくするための覆いで、これを設置してから王陵の造成工事が始められる。陵上閣の柱は18本あり、松材が用いられ、入口は南に設けられた。

陵上閣の南に取り付けられる隧道閣もまた、外から王陵がみえないようにする構造物で、屋根は油芭、左右は茅芭、門の上部は茅簷によって覆われた（挿図9）。

壙中はまたの名を金井という。実録によると、壙中の大きさは単陵と双陵が深さ9尺4寸、長さ13尺4寸であり、合葬陵は深さ9尺4寸、長さ13尺4寸である。高麗時代には、王陵や貴族墓を除く一般人は、2尺から3尺の墓壙を有していたという記録がある。朝鮮初期の王陵における壙中の深さは10尺とされていたが、中期以降、状況に応じて変化した（表4）。これは風水的要素の影響を受け、穴が石室の下に位置するように意図したことにより、地形や地脈の変化に伴い、石室の上に正穴が位置しないよう



挿図8. 陵上閣図
(正祖健陵遷奉都監儀軌, 1821年)



挿図9. 隧道閣図
(明成皇后洪陵山陵都監儀軌, 1895年)

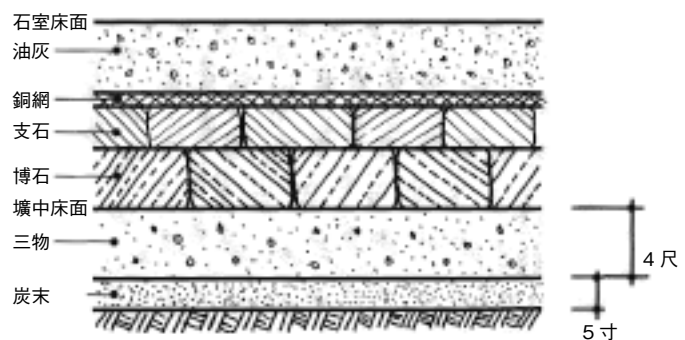
表4. 王陵別にみた壙中の深さ

王陵	壙中の深さ
明陵	7尺4寸
懿陵	8尺4寸
弘陵	8尺4寸
元陵	8尺4寸
健陵	9尺
仁陵	6尺3寸
睿陵	6尺2寸
洪陵	8尺3寸

に高低が調整された。また壙中には金井機、あるいは金井杵が設置されるが、この金井機は壙中の大きさと穴の位置がずれないようにする基準杵である。

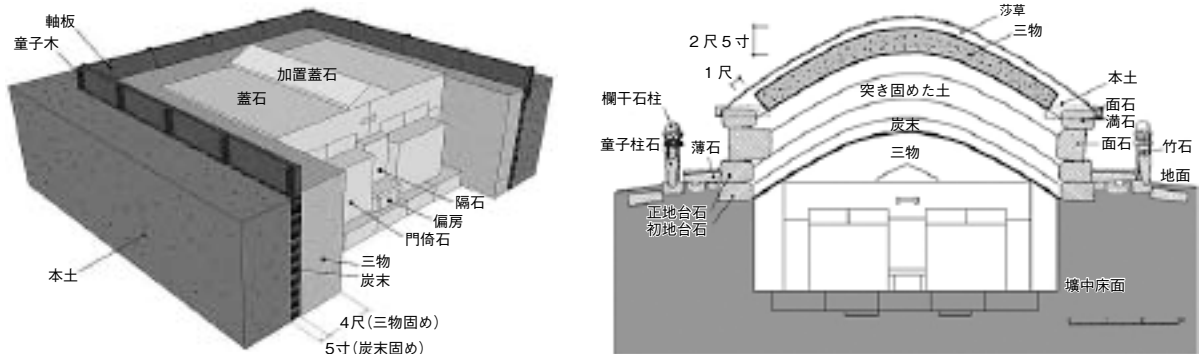
単陵・双陵の石室玄宮

壙中の床面の四方に、割石と土を練ったものを4尺の高さまで突き固める(挿図10)。次に地台石を設け、その上に石室の区画を構成する北隅石、両傍石、門立石が置かれる。梓宮を安置する場所の下には石を置かず、土に接することができるようにする。これは、屍身が地台石上に安置されると土の気を直接受けられなくなるためである。そのため、大棺は地台石の上ではなく、割石と土で整地した床面の上に直接置かれる。次に、石室玄宮の内部空間が造成される。まず地台石の上に北隅石を設ける。北隅石の両端には両傍石が置かれる。北隅石の両端にはほぞを穿ち、カマ継ぎによって両傍石と北隅石を直交させる。この両者を組み合わせるのは石室の崩壊を防ぐためであり、両傍石の南の両端には門立石を設ける。門立石の間には門闕石を配し、部材の接合部には油灰を充填する。石室壁面を支えるこれらの部材を立てると、北隅石と両傍石の高さまで割石・土を練ったものを突き固め、石室内部を除く壙中を割石で充填する。この際、石室の三面は割石と土で充填するのに対し、南側は開けておく。南側には羨道が接続し、石室を造成した後、梓宮(王や王妃の棺)を納めるために開放しておく必要があるためである。天井部には前部蓋石と後部蓋石が置かれ、後部蓋石の裏面(室内側)にはほぞを用意しておく。これは外からの圧力で北隅石が押され、石室の内部に倒れるのを防ぐため、石室の前部に置かれる蓋石も同様の役割を果たす。これらの蓋



挿図10. 単陵・双陵の石室外部築造

石は、石室の構造的安定性を維持する上で最も重要な部材である。前部蓋石は、石室に梓宮が安置された後、石室を閉塞する門倚石が石室の内部に倒れるのを防ぐ役割をも果たしている。



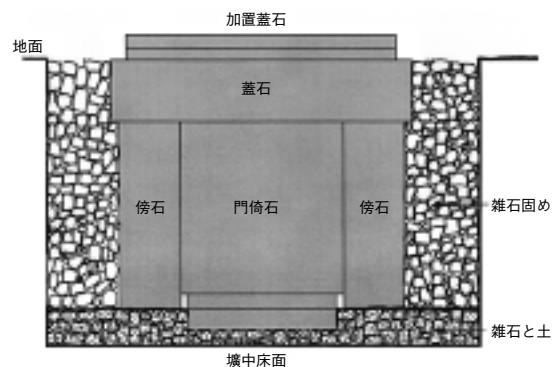
挿図11. 合葬陵の石室外部築造

合葬陵の石室玄宮

合葬陵は、2基の石室がひとつの封墳内に造成されたものである。石室玄宮は東室と西室に分かれ（挿図11）、右上左下の原則に基づき、王は西室（右）、王妃は東室（左）に配される。石室に梓宮が安置されると、いっぽうの空き部屋は寿室として隔牆（合葬）に備えられる。定められた時になると、壙中を掘り始める。東西幅は29尺で、南北長は25尺5寸である。壙中の床面に炭粉を押し固めて5寸積み上げた後、その上に三物（石灰・細砂・黄土の混合物）を4尺積み上げる（挿図12）。

次に傍石と支石をのせ、銅網を設置する。銅網とは、銅製の網と推測され、石室の基礎として鉄筋やコンクリートと同様の役割を果たすものと考えられる。また、陵室の床面が割れたり亀裂が生じた場合、石室の地盤を保護し、昆虫などの侵入による被害を軽減する役割も果たしたものと考えられる。玄宮の周囲には傍石がめぐらされ、隔石が配される中央には厚さ4尺の傍石が置かれる。

北隅石はアリ継ぎによって隔石と直交に結合され、北隅石と隔石が離れたり、脱落したりするのを防ぐ。これは石室構造に重要な役割を果たしている。さらに北隅石と傍石の結合部に大引釘を打って補強する。石室壁面が完成すれば、両側の北隅石と傍石、門扉石の外側から4尺離れた地点に板をめぐらせ、板と石室の間に三物（石灰・細砂・黄土を混ぜたもの）を充填する。三物を積み上げるたびに板を引き抜き、さらに上方へ積み上げる。この版築工法によって石室外部を三物で覆う。また三物の外側、壙中との間に生じた幅5寸の空間には炭粉を積み上げる。これらを外側の地台石の下面まで積み上げると、板の内側の四隅に小板を横に通し、本土をめぐらせて隙間を充填しながら積み上げる。小板がなければ、



挿図12. 壙中の床面構造

積み上げてきたものが本土ではなく、地台石とくっついてしまうからである⁹⁾。

このように二重構造の堅固な石室をつくり、蓋石と加置蓋石の上まで三物で灰隔を積み上げることで水漏れを防ぐことができる。以上のように、朝鮮時代の王陵の石室は、構造上の安定、雨などによる湿気、そして石室内の水漏れと排水への対策が最重要の課題とされていた。

山陵都監が「石室四面石の外側に、三物を厚さ4尺になるまで敷き詰め、築板を立て、炭粉が厚さ5寸になるまで敷き詰め、築板を立てる【2枚の軸板の厚さは計5寸である】。2枚の築板の間を童子木で支え、その中は空けておく。傍石と内板の間には三物を敷き詰め、外板の外側と地面の間は本土を強固に固める。固まった後、2枚の軸板を抜き取り、その中に炭粉を充填し、積み上げていく【尺は营造尺を用いる】。石室内の床面には、銅網をびっしりと敷き詰め、銅網の4面を鉄又釘で押さえつけ、石砌をその上に置き、石砌内には黄土と細砂で強固に積み上げる。石砌の外には本土と荒砂を混ぜたものを充填するようにしてください」と奏上したので、それに従った¹⁰⁾。

築板を設置し、その背面を童子木で支え、傍石と内板は三物で押し固め、外板には本土を使用して押し固めた。その後、築板と童子板を抜き取り、炭粉を用いてこの隙間を充填した。このように、壙中は石室外部を三物で覆い、三物を施すことで湿気を防ぎ、最後に再び本土によって石室を覆うという、二重・三重の構造になっている。

朝鮮王陵における灰隔玄宮の造成方法

3.1 世祖の灰隔玄宮の造成と意味

石室玄宮は朝鮮建国当初以降、第5代の顕陵まで造成が続けられたが、端宗の莊陵以降は灰隔玄宮によって造成された。貞純王后（睿宗夫人）の恭陵を除くと、世祖の光陵や睿宗の昌陵、成宗の宣陵、中宗の靖陵など、世祖以降の王陵玄宮はほとんどが灰隔であるが、その構造に関する研究はいまだ少ない。その理由は、灰隔玄宮に関する文献史料がいずれも断片的であることによる。記録には石室玄宮から灰隔玄宮への変化に対する明確な理由や説明がなく、玄宮の造成方法が変化したとするのみである。『睿宗実録』には、世祖の遺命を受けて世祖と貞熹王后の光陵を造成したという記事だけである。

かつて太上王は「死後は、(肉体が)速く朽ちはてるべきである。よって石室と石槨は設けないよう

9) 『世宗実録五礼儀』治葬。「其三物之外、距壙辺五寸、内用炭末築之【築至外排地台石下面相当処、於板内四隅、横立小板、使有空処、以備本土周回連築。若不横立小板、則恐四隅屬於地台石而本土之築、不相連脈也】」

10) 『世宗実録』28年(1446)5月13日。「山陵都監啓、…従石室四面石外、計三物厚四尺、立一築板、計炭末厚五寸、又立築板【両板厚、并計五寸】。両板之内、用童子木支撑、虚其中。旁石與内板間、用三物、外板之外、専地間用本土堅築、然後去其両板、用炭末填築其中。如此築上【尺用营造尺】、又石室内底滿布銅網、其網四面、用鉄又釘鎖之、置石砌於其上、石砌内、用黄土細沙堅築、石砌外、用本土與麤沙相雜填之。従之…」

にせよ…」と遺命された¹¹⁾。

光陵の造成においては、世祖の遺命に従って石室と石槨の使用を禁じ、灰隔とした。だが灰隔玄宮の使用は世祖代が初めての例であり、多くの疑問や議論を呼んだ。睿宗は世祖と貞熹王后の王陵の造成について悩んだ末、六曹の参判以上の者を召集して玄宮に関する議論を行なった。大臣らは石室の使用を主張したが、睿宗は結局、世祖の遺命を遵守したのである¹²⁾。

（王は）礼曹に対し「陵寝にはみな石室を用いてきたが、大行大王が石室をつくらぬよう命じたため、今後は遺命を遵守し、これをもって美德とせよ」と伝えた¹³⁾。

朝鮮王陵の石室玄宮には、神徳王后の靖陵、定宗と定安王后の厚陵、太宗と元敬王后の猷陵、世宗と昭憲王后の英陵などがある。その後世祖の遺命に従い、石材と石室を使用せず、灰隔玄宮によって造成される。王陵には石槨と石室は使用されなかったが、文献によると第8代睿宗の貞純王后の恭陵が石室玄宮だとあり、その後再度、灰隔玄宮が使用されている（表5）。この灰隔玄宮については造成に関する儀軌や詳しい記録がなく、その詳細を知ることができない。ただ灰隔玄宮は石室玄宮に比べ、材料や労働力といった経済面から多くの利点を有していたものと思われる。

（王は）承政院に「現在、すでに石室を用いていないにもかかわらず、役夫が多すぎるのではないか…」と語った。（これに対し）「旧例においては石室に役夫6千人を用いましたが、現在はすでに用いていないため、3千人のみです」と述べた¹⁴⁾。

石室玄宮の造成には多くの夫役を要したが、莫大な重量と容積の石材を運搬するにあたっては、多くの人命が損なわれた。また王陵の造成には漢陽と京畿付近の夫役が動員されるため、農耕期に国葬を行なうこととなると、多くの民が苦しんだと考えられる。そのため灰隔玄宮は、石室玄宮の造成に必要な公役の半分程度で済むようにし、百姓生

表5. 朝鮮王陵の玄宮形式

王陵	構造	文献	
第1代	健元陵	石室	実録
	齊陵	石室？	—
	貞陵	石室？	—
第2代	厚陵	石室	実録
第3代	猷陵	石室	実録
第4代	英陵	石室	実録
第5代	顯陵	石室	実録
第6代	莊陵	灰隔	儀軌
	思陵	灰隔	儀軌
第7代	光陵	灰隔	実録
第8代	昌陵	灰隔	実録
	恭陵	石室	実録
第9代	宣陵	灰隔	燃藜室記述
	純陵	灰隔	実録
第11代	靖陵	灰隔	燃藜室記述
	禧陵	灰隔	発掘

11) 『睿宗実録』即位年（1468）9月17日。「初、太上王遺命曰、死欲速朽、勿設石室石槨…」

12) 金相浹（前出書）、2007、p142

13) 『睿宗実録』即位年（1468）9月19日。「伝旨礼曹曰、陵寝皆用石室、而大行大王命不作石室、今宜遵奉遺命、以成美德」

14) 『睿宗実録』即位年（1468）9月23日。「伝于承政院曰、今既不用石室、役夫無乃太多乎、其亟抄還。承政院即招山陵都監郎官問之、対曰、旧例用石室役夫六千、今令既不用、故只役三千」

活の負担を軽減する効果もあったのであろう。

(王は) 経筵を行なった。講義後、すぐに領事韓明澮が(王に)「世宗以前には、国葬はすべて石室が用いられ、世祖は補板のみを使うよう遺命されました。その儉約を尊ばれる心は素晴らしいものです。ですが古くから墳墓は、微賤な者であってもすべて石室を用いてきております。したがって山陵(王陵)に補板のみを使用するのはふさわしくありません…」¹⁵⁾と申し上げた。

世宗以前の王の墓はいずれも石室によって造成されたが、世祖は補板のみ使うよう遺命した。この補板とは、灰隔の壁面を版築工法によって積み上げる際、その両端を支える枠のようなものを指すと考えられる。これについて、王陵の灰隔玄宮ではないが、『五礼儀』と『国朝喪礼補編』、『朱子家礼』、『四礼便覧』、『文公家礼』などに、灰隔の形態と構造を少しばかり知り得る内容がみられる。

3.2 灰隔玄宮の発生と定着

(1) 士大夫の灰隔墓の造成

朝鮮時代の墓制は、当代の様々な思想的基盤に基づいて形成され、多くの変化を遂げた。朝鮮の建国や統治の理念でもあった性理学(宋学)もまた、墓制にかなりの影響を及ぼした。これについて『経国大典』には、墓制の規模や品階、墓碑、石物などの等級が記されている。朝鮮初期、一部の新進知識階層のみが理解してきたこれらの墓制は、16世紀以降、各学派による礼制研究が進み、より一般化していった。こうした状況は、朱子の『家礼』に示された灰隔墓を定着させる契機となったものと思われる(写真5~7)。「朱子家礼」巻4(喪礼 治葬)には、灰隔墓に関する説明がみられる。

壙を掘る。炭粉を壙の最下面に2~3寸築く。その上に三物(石灰3, 細砂1, 黄土1)を2~3寸広げて築く。薄板を利用して灰隔(槲の形)をつくる。灰隔内には、瀝青(松脂)を3寸ほど塗

〈李基祖灰槲墓の発掘過程〉



写真5. 灰槲天板の除去過程

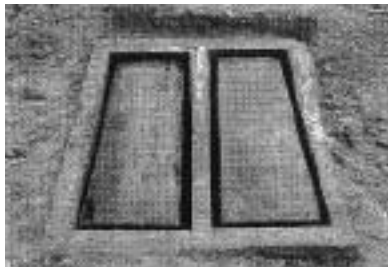


写真6. 木棺露出状態



写真7. 天板の除去後状態

参考：金禹臨2007『ソウル京畿地域の朝鮮時代士大夫の墓制研究』、高麗大学校博士論文、2007)

15) 『成宗実録』15年(1484)4月26日壬午。「御経筵。講訖、領事韓明澮啓曰、自世宗以前、国葬皆用石室、世祖遺教、只用補板、其崇儉之意、至矣。然古人雖微者、其墳墓皆用石室、山陵只用補板、甚不便…」

る。牆（内部の型）は、灰隔の中に棺が納まるよう、棺よりも4寸ほど高めにつくる。その四方に四物をめぐらせる。その際、薄板によって炭粉を外に、三物を内に分け隔てる。厚さは床（2～3寸）と同様である。積み上げた物質が固まればすぐに板を引き上げ、再び炭粉や石灰などを牆の高さまで積み上げ、平坦になった時点で止める¹⁶⁾。

灰隔の中は、棺が納まる枠をつくり、その四方を四物で築く。四物とは石灰、細砂、黄土、炭粉を指し、三物に炭粉を加えたものである。炭粉は「木の根を遮り、水と蟻を寄せ付けず、石灰は砂と混ぜると強固になり、黄土と混ぜると粘り気が増し、歳月を経て石のように固くなるため、ケラや蟻、泥棒をいずれも寄せ付けない」¹⁷⁾ という。また『増補四礼便覧』には

壙を掘った後、三物を利用して灰隔をつくる。厚さ2～3寸の床を築いて平坦に整える。その（床面）中央、棺を置く位置に清浄な石灰を平らに敷く。浄灰を敷いた中央には清浄な土を、その四方には三物を厚さ2～3寸で、8～10回に分けて突き固め、棺より4～5寸高くする。その上部の正中央に内金井機を設置（清浄な土で固めた場所）し、清浄な土を掘り、最初に設置した清浄な石灰（浄灰）で止めると、最初の床を固めた地灰となる。薄板を下（床）に敷き、油灰で隙間を塗る。（槨の形態と同じである）牆（灰隔）の高さは、棺より1寸程度高くする（槨を用いる場合は、地灰を設けてから槨を設置し、槨の外周に真土と石灰を充填させる）。もち米の汁と浄灰を混ぜたものを灰隔の四方（内部）に薄く塗る。民家の壁を塗るがごとくである¹⁸⁾。

これは壙中を掘り、中央に棺を設置して石灰を築きつつ積み上げる方法で、厚さが2～3寸になるよう8～10回突き固め、棺よりも4～5寸高めに造成する。また「大夫士庶人喪儀」には

壙を掘る。炭粉を壙の最下面に2～3寸積み固める。三物（石灰3、細砂1、黄土1）をその上に2～3寸、堅固に築く。その中央に槨を設置する。槨の四方に四物をめぐらせる。四物は、外側の炭粉と内側の三物を薄板によって分け隔て、（三物の）厚さは床と同じにする。築いた物質が固まったらすぐに板を引き上げる。さらに炭や石灰を入れて槨の上部まで築き、平坦になれば完了であ

16) 『朱子家礼』 卷四、喪礼、治葬。「作灰隔。穿壙既畢、先布炭末於壙底築實厚二三寸、然後布石灰細沙黄土拌均者於其上灰三分二者各一可也築實厚二三寸別用薄板為灰隔如槨之狀、内以瀝青塗之厚三寸許、中取容棺牆高於棺四寸許置於灰上、乃於四旁旋下四物亦以薄板隔之炭末居外三物居内如底之厚、築之既實則旋抽其板近上復下炭灰等而築之及牆之平而止」

17) イム・ミンヒョク『朱子家礼』（イェムンソウォン、2003）、p326

18) アン・ギョンホ「朝鮮陵制の灰隔造成方法」（『精神文化研究』32-3（通巻116）、2009、p310（再引用）

『増補四礼便覧』 卷5、喪礼、治葬、作灰隔。「作灰隔。穿壙既畢布石灰細沙黄土拌勻者築實為灰隔【築底厚二三寸然後攤平、其上即於中間容棺之處先布以浄灰務取方正以識底平、乃於四旁納三物拌勻者以二三寸為度中實浄土亦如之并杵踏築至八九度或十余度視棺高加四五寸、然後攤平其上即於正中安内金井機掘居所實浄土盡浄灰而止初築底者即為地灰】。語類。以薄板布于下用油灰布其縫】如槨之狀【牆高於棺一寸許。若用槨則先築地灰然後下槨二躡実泥灰於槨外四牆】（語類。仍用糯米汁調浄灰遍灰四方【薄塗如俗屋壁塗沙】）

る¹⁹⁾。

灰隔は壙中の床面に炭粉を2～3寸築き、その上面の中央に木棺を安置するもので、木棺は内部の型の役割を担っている。外側には薄板をめぐらせ、三物や四物を注意を払ってしっかりと築くが、これらが固まると板を上部へ1枚ずつ引き上げる。三物は通常8～10回に分けて築かれ、その間には油灰が塗られる。これは棺を枠として利用しつつ築くもので、『朱子家礼』にみられる灰隔造成法と同じである。

(2) 灰隔玄宮の定着

朝鮮王朝において、灰隔玄宮によって造成した王陵は、第7代王である世祖の光陵を嚆矢とする。しかし、どのように玄宮を灰隔で造成したのかに対する記録は詳細ではない。以下、『世宗実録』には三物を積み上げる方法が簡略に叙述されている。

(石室の) 4面を積み上げる際は、炭粉がふわふわと浮いて高く積み上げるのが困難なため、石室の四面石の外側に厚さ4尺の三物を積み上げて築板を1枚立て、厚さ5寸の炭粉を積み上げてさらに築板を1枚立てる【両板の厚さは合わせて5寸とする】。築板2枚の内側は童子木によって支え、その間は空けておく。旁石と内板の間は三物で、外板の外側と地面の間は本土で堅固に築く。次に2枚の築板を抜き取り、抜き取った部分に炭粉を入れて充填する【尺は营造尺を使用する】²⁰⁾

四面石の外側を覆う三物は、厚さが4尺にもなる。三物を積み上げる際には2枚の築板と童子木が支えとなり、三物が固まると築板を抜き取り、その隙間に炭粉を充填した。こうした方法は朝鮮初期の石室から使用されてきた。築板を利用した三物の積み上げ工法は、灰隔玄宮の造成時にも用いられていたものと考えられる。しかし、この築板や木板、補板などに関しては、いくつかの問題点が指摘されている。

(石室にすると) 地脈を掘って傷つけてしまうことが懸念されるが、(灰隔なら) 梓宮の四面に木板を設けることになり、地脈を傷つけるという点では同様である²¹⁾。

19) 『国朝五礼儀』巻8, 凶礼, 大夫士庶人喪礼, 作灰隔。「遂穿壙【其穿地宜狭而深狭則不崩損深則盜難近也】、既畢先布灰末於壙底築實厚二三寸, 次鋪石灰細沙黄土拌均者於其上【灰三分細沙黄土各一分】築實厚二三寸, 置槨於其上当中, 乃於四旁旋下四物用薄板隔之炭末居外三物居内如底之厚, 築之既實則旋抽其板近上, 復下炭灰等物而築之及槨之平而止」

20) 『世宗実録』28年(1446)5月13日。「右四面築時, 炭性浮虚, 高築為難, 從石室四面石外, 計三物厚四尺, 立一築板, 計炭末厚五寸, 又立築板【両板厚, 并計五寸】。両板之内, 用童子木支撑, 虚其中。旁石與内板間, 用三物, 外板之外, 專地間用本土堅築, 然後去其両板, 用炭末填築其中。如此築上【尺用营造尺】。」

21) 『睿宗実録』即位年(1468)9月22日。「雖慮水氣停畜, 室無底石, 則亦足滲洩; 雖慮掘傷地脈, 梓宮四面, 又設木板, 則其傷地脈一也」

帝王の陵寢には石室と莎台石がなくてはならず、今からでも制度として定め、後世に伝えるべきです。現在石室の代わりに用いる補板は、杵で突き固めると曲がってしまうため堅固に積み上げることができず、また腐敗しやすく水気が染み込むため、中の梓宮ばかりか外の三物が濡れてしまいます。これは、石室がないためです²²⁾。

「国葬の際、壙中には補板を使用するな。また灰隔を5寸減らし、すべて己丑年（孝宗即位年）の典礼に従え。壙中が広すぎると考えたためである²³⁾。

板材は地脈を傷つけ、水気が染み込み、三物を突き固める際に曲がってしまうため、堅固につくれないという欠点があった。『国朝喪礼補編』には

定められた時になると、壙を掘る…。深さは10尺【营造尺を用いる】で、幅と長さは大棺の外側を測り、それぞれ3尺大きめにつくり、南壁にのみ本来ある土を残しておく。壙をすべて掘ったら灰隔をつくる…。まず、三物を壙の床に敷き詰める際は厚さ3寸とし、次いで輓轡を設置する…。3枚の横帯板を盖板の上に置く【油茷で蓋石を覆い、また油茷を大棺の三面に貼りつけ、壁に石灰を塗る際、少しずつ引き上げる】…。その東・西・北の3面に、三物を横帯板のあるところまで充填する【3面と横帯板の上に貼りつけてあった油茷を取り除く】。再度三物を、金井の内部がいっぱいになるまで堅固に積み上げる…。初地台石と欄干脚部の台石と隅石の接合部には小石を用いて空間をつくり、三物を充填し、石柱12個を隅石上に立てる…。金井機を取り外し、天灰の上に三物を充填するが、鍋を逆さにした形のごとく、厚さが2尺5寸になるまで堅固に積み上げる。また、壙中を掘った際に生じた土を剝円まで積み上げる。莎土で覆う²⁴⁾。

灰隔内部に設置した大棺の外側三面に、補板ではなく油茷が用いられている。床面の厚さは3寸とし、東・西・北面は横帯板の高さまで三物を充填する。また、油茷を大棺の三面に貼りつけ、壁面に石灰を積み上げ、固まったらこれを漸次引き上げ、固め上げていく。この造成方法は、一層一層を築いていく版築工法に類似している。

3.3 灰隔玄宮の造成方法

(1) 旧禧陵灰隔玄宮の現況

旧禧陵は中宗の継妃である章敬王后陵の跡地で、陵は現在、西三陵地域に遷されている。2008年1月に発掘が行なわれ、玄宮の構造や規模を知る上で良好な事例である。

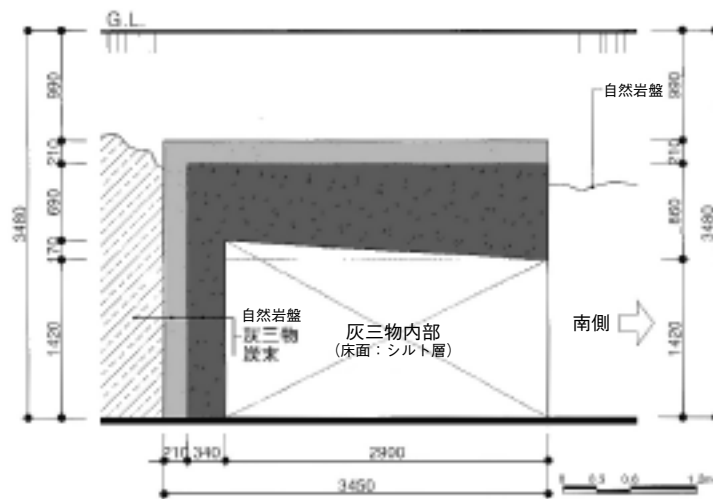
22) 『成宗実録』9年（1478）7月26日。「然帝王陵寢不可無石室莎台石，繼自今須定制，以垂後世…。今以補板代石室，杵築之時，板子撓屈，不能固築，且易為腐毀，水氣浸灌，内潤梓宮，外湿三物，此無石室之故地。且健元陵，顯陵，獻陵無屢頽之弊，獨光陵易崩者，無他不用莎台石也」

23) 『顯宗実録』即位年（1659）8月3日。「命因山壙中勿用補板，且減灰隔五寸，皆依己丑年例，蓋慮壙中之太闊也」

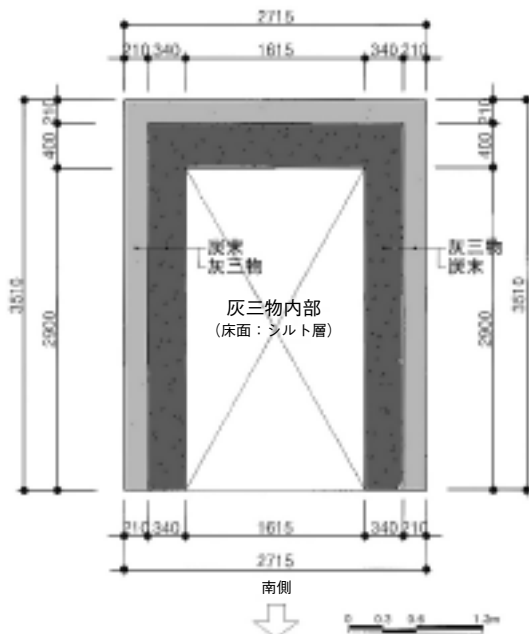
24) 国立文化財研究所『国朝喪礼補編』（民俗苑，2008），p171

玄宮は灰隔による造成で、幅1,615mm、長さ2,900mm、高さ約1,420mmを測り、天井は背面から前面にいたるまで約17cmの傾斜がみられる。傍灰の厚さは約340mmを測り、内部の表面は比較的均一で、直角と直線がきれいにできているが、外部はそうではない（図面4～6）。

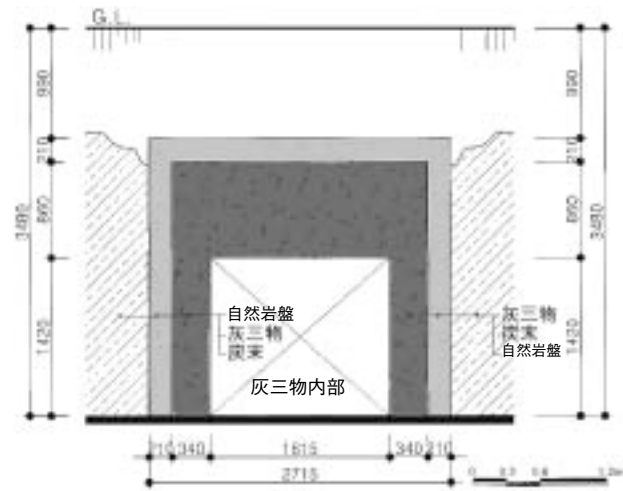
これは、旧禧陵が岩盤層に造成されたため、玄宮外部に築板や補板を設置できなかったことに起因すると考えられる。そこで岩盤上に玄宮を造成し、傍灰として三物を築き、天井部は前後3枚からなる板材を設け、その上に天灰を突き固めて天井をなしている。壁面（傍灰）には3本の水平線が一定間隔に走っており、これによって三物を一層ずつ積み上げたことがわかる（写真8・9）。この水平線は補板と補板との接合部に出来た隙間と考えられ、さらに3本という数から、一面に4枚の補板が使用されたものと考えられる。



図面4. 旧禧陵の玄宮横断面図



図面5. 旧禧陵の玄宮平面図



図面6. 旧禧陵の玄宮縦断面図



写真 8. 旧禧陵の玄宮入口



写真 9. 旧禧陵の玄宮内部

補板は1枚の高さが約330mmである。天井部には2本の水平線が走っており、横帯板を前後に3枚組み合わせた痕跡と考えられる。内部の面には屈曲がみられないことから、面がきれいな木材を用いたことを意味するものであろう。天井部は横帯板の上に天灰を突き固めつつ積み上げるため、玄宮内部にもこれを支える部材が必要となる。『英祖実録』には「壙内の外梓宮の上に横帯板を設置する理由は、梓宮の上に天灰を積み上げるためである」²⁵⁾とある。梓宮の上の天灰とは玄宮の天井部のことで、横帯板の重要性を説明したものである。また灰隔の外部には、傍灰を厚さ約340mmずつ、およそ8回に分けて突き固めた痕跡が確認され、その上部全体を厚さ210mmの炭粉が覆う。ただ、旧禧陵は天井部が覆釜形²⁶⁾をなしておらず、文献とは異なる。

(2) 灰隔玄宮の造成

王陵は時となれば壙中を掘り始めるが、壙中の周辺には陵上閣、またの名を瓮家という、藁で編んだ仮設物を設置する。これは壙中が外部からみえないようにするためである。尺は通常、营造尺を使用する。壙中の深さは、朝鮮初期においては10尺であったが、中期以降は状況に応じて変化した。

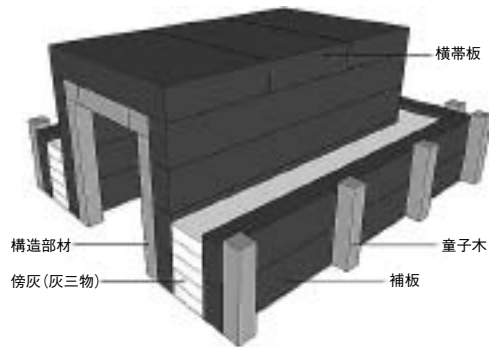
「墓穴の深さは营造尺で10尺あればひとまず問題ない。土圭で10尺あれば、深すぎる。浅い方が良く、深いと良くないゆえ、度を越えないようにせよ」と有旨を下した【有旨は浮石條に記されている】²⁷⁾。

次に、壙中の内部に設置した四壁と地面の高さが平坦になるよう整え、「灰三物によって地面を固める

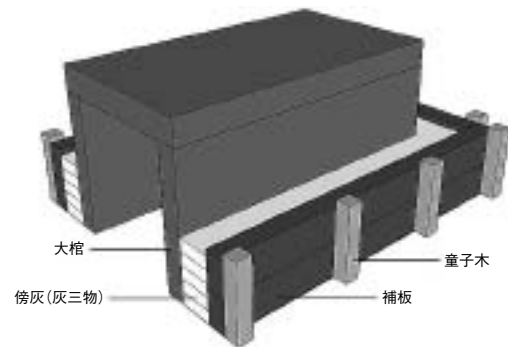
25) 『英祖実録』33年（1757）5月6日。「内壙中横帯板即設於外梓宮上者蓋不敢遽設天灰於梓宮上故也」

26) 覆釜形とは、墳墓を造成する際、棺を壙中に置いた後、封墳を完全につくる前に、釜を伏せた形態の模様をつくること。

27) 『顕隆園園所都監儀軌』巻3



挿図13. 補板による灰隔造成 (推定)



挿図14. 大棺による灰隔造成 (推定)

が、必要な石灰は57石であった。平坦に撒く場合は6寸、杵で突き固める場合は3寸を基準としたが、まっすぐに突き固めることはできなかった²⁸⁾とある。三物は石灰と本土(土)、細砂を配合してつくり、配合率は3:1:1である。このように、床面を杵で十分に突き固めてから壁三面の外側に傍灰を突き固めつつ積み上げる。傍灰を積み上げる際は、まず定められた尺数にしたがって杵を配置する。

杵の構造には二通りある。ひとつは補板と横帯板で杵をつくり、その内側を堅固な構造材で支えるもの(挿図13)である。これは、三物の重量と版築作業からくる荷重によって補板と横帯板が破損・湾曲しないよう防ぎ、構造材を使用する方式である。もうひとつは、壙中に床面を敷き詰めてから大棺を安置し(挿図14)、横帯板と補板を設置するものである。大棺の規模によって玄宮の規模が定められ、大棺が構造材としての役割をも果たしている。『顕隆園園所都監儀軌』には

…紬布を浄水に浸して粉の跡を拭きとり、壙中の上を覆う板(横帯板)3枚を外梓宮の上に置く。横帯板の上は進献油茷ひとつで覆い、その上に砂を盛った木綿の風呂敷6枚を配した。これは石灰を突き固める際、動かないようにするためである。上・左・右三面には進献油茷を切って貼り付け、少しずつ引き上げる。これは石灰を突き固める際、漆塗の部分が汚れないようにするためである…²⁹⁾。

外梓宮の上に横帯板3枚をのせて砂袋で固定し、三面には進献油茷を切ったものを貼り付け、石灰を突き固める際、漆塗の大棺が傷まないようにした。

傍灰を積み上げる作業は13回にわたって行なわれる。1回ごとに6寸を平らに敷き、3寸の高さになるまで杵で突き固め、この作業を横帯板の上面まで行なった。天灰の積み上げは5回にわたって行なわれ、毎回6寸を敷き、これを3寸の高さになるまで杵で突き固め、この作業を金井機の下隅まで行なった。また、天灰を覆釜形にするため、金井機を取り除き、全5回にわたって三物の量を減らしつつ突き固め、覆釜形に整えた。傍灰や天灰は杵で突き固めた後、時間が経過すると化学反応を起こして堅固に

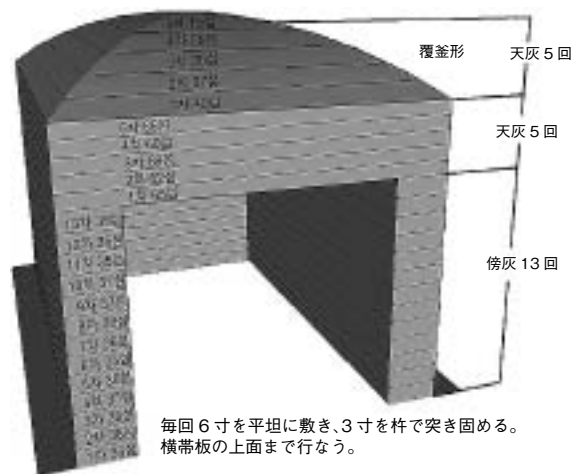
28) 『顕隆園園所都監儀軌』巻3

29) 『顕隆園園所都監儀軌』巻3

なる性質を有する。さらに、通常は水を用いるが、水の代わりにニレの樹皮を煮詰めた濃縮液を三物と混ぜ合わせ、防水性能を高めることもある³⁰⁾。三物が固まると、杵の役割を果たした補板を抜き取って三物の上に再度設置し、抜き取り跡に炭粉を入れて突き固める。炭粉も毎層突き固められた。このように傍灰と天灰は、同様の方法が用いられる（表6および挿図15）。

表6. 灰隔玄宮の灰三物の築造方法

灰隔壁（傍灰）	灰隔天井（天灰）	覆釜形（天灰）
石灰・黄土・細砂の三種類を一カ所に混ぜて練った物質		
1回36石 ³¹⁾	1回65石	1回40石
2回38石	2回62石	2回37石
3回38石	3回62石	3回30石
4回35石	4回60石	4回25石
5回36石	5回65石	5石15石
6回35石		
7回36石		
8回38石		
9回37石		
10回37石		
11回35石		
12回36石		
13回39石		
毎回6寸を平坦に敷き、3寸を杵で突き固める。横帯板の上面まで行なう。	毎回6寸を平坦に敷き、3寸を杵で突き固める。金井機下の柱まで行なう。	金井機を除去し、天灰を覆釜形につくる。



挿図15. 灰隔玄宮における三物の版築

30) 朝鮮技術発展史編纂委員会『朝鮮技術発展史4』（科学百科事典総合出版社、1997）、p89

31) 表の中一石は容積の単位。1石は180.39ml（約180l）。米の一石は約80kgで、一かますに該当し、一石は10升である。

天灰を突き固めた旨は昨日申し上げましたが、金井機を撤去して封墳を完全に覆釜形にいたしました。扉風石の下の磚石は魚鱗のごとく整然と配し、曲墻を設ける場所を整地しはじめたことを報告申し上げます³²⁾。

天灰を突き固めて覆釜形に整えた後、扉風石と曲墻の築造が始まる。三物を用いた灰隔玄宮の造成は世祖の遺命によって朝鮮王陵に採用されるが、若干の差異はあるものの、その後も継続され、朝鮮王陵の陵制として定着した。その理由は、灰隔が石室よりも造成期間が短く、石材の加工・運搬の必要性や経済的負担が少なかったためであろう。これに伴い、民が国葬に夫役する期間も短くなり、農耕生活に負担を与えなくなったことであろう。

4. 結論

朝鮮は建国直後から高麗末の文化・政治・経済・社会的混乱を收拾し、あらたな集権体制の構築に努めた。

朝鮮王陵の玄宮は、初期には石室が用いられた。世宗代には古制研究がまとめられ、『五礼儀』として編纂された。玄宮はその後、世祖の遺命により灰隔によって造成された。石室玄宮は、単陵と双陵、合葬陵がそれぞれ異なる部材を使用して造成された。単陵と双陵は壙中に傍石と北隅石、蓋石、加置蓋石、門立石、門闕石、門扉石、門倚石などが配され、合葬陵では単陵の部材以外に仕切り壁の役割をする隔石が配された。隔石は石室の南北方向に配され、その中央部には窓穴が穿たれた。また、隔石の北には北隅石が配され、隔石との接合部にはアリ継ぎが用いられた。北隅石と両傍石の接合部にはカマ継ぎが用いられ、外れたり傾いたりしないように石材を固定した。単陵と双陵は、北隅石の両端と両傍石がカマ継ぎによって組み合わされ、石室上部を覆う蓋石の裏（室内側）には下面にほぞを用いて北隅石と両傍石、門立石などとかませ、各石材が石室内へ傾くのを防ぎ、上部からの圧力を支える役割を果たした。単陵と双陵は蓋石を中心として玄宮が造成され、『五礼儀』以降の合葬陵では隔石を中心に東・西室が分かれる玄宮が造成された。玄宮が造成される床面には、単陵と双陵は割石と土を練ったものを突き固めたのに対し、合葬陵には炭粉と三物、銅網などを用いた、より堅固な版築工法が用いられた。また石室玄宮外部には、築板と童子木を置いて三物を押し固め、築板と童子木を抜き取り、それらがあつた場所に炭粉を詰め込んで積み上げた。

このような方法は、時間が経つにつれ三物が石のように固くなるという特性と同時に、湿気による被害を防ぎ、石室を長期にわたって維持するためのものである。世宗代にいたるまでの古制研究を成果に基づき、発達させたものといえよう。この方法は『世宗実録五礼儀』や『国朝統五礼儀』などにも記されているが、世祖の光陵以降、王陵は石室ではなくなり、灰隔玄宮に取って代わられる。

灰隔玄宮は世祖の遺命によって王陵に採用された。朝鮮初期の儒教的理念の確立と普及を受け、朱子による『家礼』に記された灰隔墓は大いに普及し、施行された。灰隔玄宮においては、まず壙中を掘り、炭粉を床面に敷き詰め、三物を床に押し固める。次に傍灰を積み上げるが、これはふたつの方法に大別

32) 『顕隆園園所都監儀軌』巻3

される。ひとつは玄宮内部に補板と横帯板を設置し、さらに三物の重量と版築の圧力によってこれらが破損・屈曲しないよう、柱や梁の役割を果たす構造材によって支える方法である。もうひとつは壙中に床を設けてから大棺を安置し、大棺を支える横帯板と補板を設け、三物を突き固める方法である。この場合、玄宮の規模は大棺の大きさに左右される。石室玄宮の外壁とは造成方法に差があるが、概念は同じものといえよう。築板と童子木でつくった枠の隙間に炭粉を充填する石室玄宮外部の三物と、灰隔玄宮における版築工法の傍灰は、同一の概念であろう。これは文献からも類例をみいだすことができ、旧禧陵の発掘調査からも明らかとなった。

朝鮮王陵を理解するにあたっては、五百年にわたる王陵の事例を詳しく調査・検討することが必要である。王陵の発掘が困難な現状において、文献による玄宮造成の考察は実証的とはいいがたいが、こうした検討が朝鮮王陵の玄宮構造と造成方法の理解や、関連分野の進展に一助するところがあれば幸いである。

参考文献

1. 『世宗実録五礼儀』, 治葬
2. 『国朝五礼儀』
3. 『国朝喪礼補編』 治葬
4. 『増補四礼便覧』 卷五, 喪礼, 治葬, 作灰隔
5. 李昌煥『朝鮮時代陵域の立地と空間構成に関する研究』（成均館大学院博士論文, 1999）
6. 金相浹『朝鮮王陵石室および陵上構造の変遷に関する研究』（明知大学校博士論文, 2007）
7. 金相浹「朝鮮前期王陵の石室築造の研究」（『大韓建築学会論文集』v. 25, n. 7, 2009）
8. 金相浹「朝鮮王陵灰隔玄宮の築造方法研究」（韓国建築歴史学会春季学術発表, 2010）
9. 文化財庁「旧禧陵保存・整備報告書」（文化財庁, 2008）
10. 文化広報部・文化管理局「居昌屯馬里壁画古墳および灰槨墓発掘調査」（文化財管理局, 1974）

- 今西龍「高麗諸陵墓調査報告」『朝鮮古蹟調査報告大正五年度』（朝鮮総督府，1974）
- 金元龍・安輝濬『韓国美術史』（ソウル大学校出版部，1993）
- 『睿宗実録』
- 『顯宗実録』
- 『英祖実録』
- 『顯隆園園所都監儀軌』巻3
- イム・ミンヒョク『朱子家礼』（イエムンソウォン，2003）
- アン・ギョンホ「朝鮮陵制の灰隔造成方法」（『精神文化研究』32-3（通巻116），2009）
- 国立文化財研究所『国朝喪礼補編』（民俗苑，2008）
- 朝鮮技術発展史編纂委員会『朝鮮技術発展史4』（科学百科事典総合出版社，1997）